17 世紀の撥音に関する考察

『捷解新語』のハングル音注を通して

A Study of Japanese Syllabic Nasal /N/ (*Hatsuon*) in the 17th Century
—Through Hangul in the Korean Textbook “Cheob-hae-sin-eo”

中 山　め ぐ み
Megumi Nakayama

Abstract *The purpose of this paper is to clarify the transcriptions of* Hatsuon *(Japanese syllabic nasal /N/) using Hangul in the 1st edition of the Korean Textbook ‘Cheob-hae-sin-eo’, as well as to examine the actual state of* Hatsuon *in the 17th century.*

In this textbook, every Hatsuon *in the final syllable of a word was represented by* ㄴ *n, while* Hatsuon *in the initial or medial syllable of words was represented by 3 types of transcriptions as follows.*

1. ‘ㄴ*n*＋Hei-on *(Korean lax consonant)’*
   :ㄴ-ㄱ *n-g*、ㄴ-ㄷ *n-d*、ㄴ-ㄴ *n-n*、ㄴ-ㅈ *n-j*、ㄴ-ㅅ *n-s*、ㄴ-ㅂ *n-b*、ㄴ-ㅁ *n-m*
   This is used mainly for Kanji words to represent both ‘Hatsuon＋Sei-on *(Japanese voiceless consonant＋vowel)’ and* ‘Hatsuon＋Dakuon *(Japanese voiced consonant＋vowel), na-line or ma-line’.*
2. *‘Nasal (* ㄴ*n*、ㅁ*m)*＋Nō-on *(Korean non-aspirated consonant)*
   :ㄴ-ㄲ *n-gg*、ㄴ-ㄸ *n-dd*、ㅁ-ㅃ *m-bb*
   This is used for words of Japanese origin, Kanji words, and words derived from Korean words, to represent ‘Hatsuon＋*ka-line,ta-line or pa-line’.*
3. *‘On-glide Nasal*＋Hei-on*’*
   :ㅇ-ㄱ *ŋ-g*、ㄴ-ㄷ *n-d*、ㄴ-ㄴ *n-n*、ㄴ-ㅈ *n-j*、ㄴ-ㅅ *n-s*、ㄴ-ㅿ *n-z*、ㅁ-ㅂ *m-b*、ㅁ-ㅁ *m-m*
   This is used for words of Japanese origin, Kanji words, and words derived from the Korean words, to represent ‘Hatsuon＋Dakuon, *na-line or ma-line’.*

I argue that Hatsuon *in the 17th century Japanese Language on which this textbook is based, had been assimilated to the following consonant in the initial and medial syllable of a word, and furthermore that it had already lost its dental feature in the last syllable.*

キーワード：清音、濁音、濃音、平音、入り渡り、逆行同化
学際領域：音韻、日韓対照

1. はじめに

『捷解新語』は日朝の外交事務に携わる朝鮮の通訳官養成のために、朝鮮王朝時代の韓国で使用されていた日本語の教科書である。本文はひらがなで書かれ、各ひらがなに対応して一文字ずつそのひらがなの音を示すハングル音注が施されている。日本語の拍に対応した音節文字であるひらがなと、音素文字を音節単位で漢字のように四角く表記するハングル、これら 2 種類の異なる文字を対照しながら日本語の音が考察できる点が、この資料のすぐれた特徴であろう。キリシタン資料のローマ字が規範的で統一された表記であるのに対して、『捷解新語』の表記、とりわけ初版本である原刊本に見られる多様な表記は複雑で解釈が難しいが、それだけに興味がそそられる。

本稿では『捷解新語』の仮名とハングル音注を通して、17 世紀の撥音に関する考察を行なう。方法として、まず原刊本から撥音を示すと思われるひらがなとハングルをすべて抜き出し、それらを他の資料と対照しながら後続音別、語種別に整理する。その作業を通して音注の表記方法を解明し、当時の撥音の実情を探りたい。

キリシタン資料では t 入声が Tetbǒ（鉄棒）、Aisat（挨拶）など t で表記されているが（文字の上の・は筆者が付す。以下同様）、『捷解新語』における t 入声は原刊本においてすでに「あいさつ아이사ᄶᅮ 'a-'i-sa-jju」のように開音節化した表記となっている[1)]。語末の［t］が［tsu］に変化していたのであれば、語末の［n］も舌音性を失っていたのであろうか[2)]。その点についても考察したい。

ここで扱うのは『捷解新語』の原刊本（1676）であるが[3)]、同改修本（1748 年刊行）、同重刊本（1781 年刊行）の改修状況の追跡や、『日葡辞書』（1603–04）、『ロドリゲス日本大文典』（1604–08）、『大蔵虎明本狂言集』（1642 年に大蔵虎明書写）、『倭語類解』（18 世紀初頭頃）など同時代資料の表記も参考にしながら考察を進める。

2. 撥音について

現代語の撥音はひらがな「ん」で表されているが、実際の音声は後続音に同化しているため一つではない。撥音の起源は、和語は音便変化から、漢語は語末の舌内鼻音 n と唇内鼻音 m から生まれたと考えられる。語末の撥音は室町末期には［n］で実現されていたであろうことが『ロドリゲス日本大文典』などに記述された連声現象の例から推測されている。

Cannyô（肝要）、Bequennha（べけんや）、Ninguenna（人間は）、Cannon（漢音）、Innen（因縁）[4)]

語末の撥音の舌音性が失われた時期に関して奥村（1972）は中世〜近世初期の頃であろうとしている。その理由は、江戸時代初期輸入の黄檗唐音で喉内鼻音 ŋ が「剛カン・相シャン」のようにンで表記されているが、もし撥音を表すンが n であったなら ŋ 韻尾をンで表記できなかったであろうというものである（pp. 77–

78)。

3. 撥音表記の全般的な状況

3. 1 語末

本書[5)] における語末の撥音表記はすべて「ん ㄴ n」である。後続の子音が軟口蓋音 g や両唇音 b、m であっても「ん ㅇ ŋ」や「ん ㅁ m」になることはない。

g：もんあんこそ몬안고쏘mon-'an-go-sso（5-17b）（5-20a）[6)] (問安こそ)

b：もんあんはかり몬안바까리mon-'an-ba-gg-ri（8-20a）(問安ばかり)

m：いつきんも읻긴모'id-gin-mo（10-24b）(一斤も)

韓（1989）はこれについて「単語の語尾という意識が強くはたらいてしまったために［n］で表した」(p. 101：7-8）のであって「実際には後接音によって［n］［m］［ŋ］を使いわけて発音していたが、表記上［n］としただけ」(p. 101：8-9）であろうとしている。確かに、後続語の頭子音が軟口蓋音や両唇音であれば実際には同化した音で発音されたと考えるほうが自然である。では、後続音が母音、半母音であったり、ゼロであった場合はどうであろうか。連声を表していると思われる例は次の 2 例である。

1. たいめんならは다이면나라바 da-'i-myən-na-ra-ba（1-7a）(対面あらば)[7)]
2. かんによう간뇨우 gan-nyo-'u（4-13a）(肝要)

連声現象は虎明本狂言であれキリシタン資料であれ、同時代資料においても表記にほとんど現れない。上記 2 例も、その語彙に化石化した連声現象の跡と見るべきか、連声現象は存在したが表記に現れたのがこの 2 例だけだったと考えるべきか、分からない。

しかし林（2000）には、本書の対格助詞ヲの語例中、次の 4 例は実は格助詞ノだったであろうという指摘がある（pp. 110-119)。下線は音注の提示箇所である。

1. われら<u>しよしんお</u>あらわれんやうに쇼신오 syo-sin-'o（1-5a）(我ら初心の現れん様に)
2. <u>御ねんお</u>いた御つかいてこそ御されᅌᅩ년오 ŋgo-nyən-'o（5-20a）(御念の入った御使でこそ御座れ)
3. <u>御ねんお</u>いた御こころかけᅌᅩ년오 ŋgo-nyən-'o（5-28b）(御念の入った御心掛け)
4. それにつき<u>さんお</u>おもしろさにまようて산오 san-'o（6-9a）(其れに就き盞の面白さに迷うて)

当時の日本語においては連声現象により撥音の直後のヲがノと発音されていたため、撥音に続く助詞ノまでヲと解釈して過剰訂正してしまったというもので、興味深い指摘である。少なくとも「撥音＋助詞ヲ」では依然として連声現象が起きていた可能性がある。

3. 2　語中

語中では後続音がカ、サ、タ、パ行（頭子音が無声音)、ザ、ダ、ナ、ラ行（頭子音が歯茎音)、母音、半母音の場合は、語末同様に「んㄴn」で表されている。しかし、後続音がガ行音、バ行音、マ行音の場合はㄴnで表される例もあるが、音注の異なる表記の例もある。以下に例を1例ずつ挙げる。

1.「んㄴn」の表記
　ガ行：しふんからᄉᆡ분가라 zi-bun-ga-ra（時分柄)
　バ行：さんはん산반 san-ban（三番)
　マ行：ほんもう혼모우 hon-mo-'u（本望)

2.「んㄴn」でない表記
　ガ行：たんこ당고 daŋ-go（丹後)
　バ行：はんふん홤분 hoam-bun（半分)
　マ行：きんみ김미 gim-mi（吟味)

2の表記では軟口蓋音gの前ではㅇŋ、両唇音b、mの前ではㅁmとなっている。これらの末子音ㅇŋ、ㅁmは後続音への同化を表しているように見える。しかし、ㅇŋとㅁmが同化を示すだけなら、カ行やパ行の前でも現れてよいはずであるが、それらの前ではほとんどがㄴnである（e.g. 臣下신가 sin-ga、巡杯슌바이 syun-ba-'i）[8]。

ところで、本書の語中の濁音の表記には次のものがある。濁音部分のひらがなに下線を付す。

　ガ行：すかた숭가다suŋ-ga-da（姿)
　ダ行：ゆたん윤단 'yun-dan（油断)
　　　　はち환지hoan-ji（恥)
　　　　いつれ인주례'in-ju-ryəi（何れ)
　ザ行：すす순수sun-su（錫)
　　　　さそ산소san-zo（さぞ)
　バ行：およふ오욤부'o-'yom-bu（及ぶ)

この表記では、後続音と同じ調音点の鼻音（軟口蓋音gの前はㅇŋ、歯茎音d、dʒ、dz、zの前はㄴn、両唇音bの前はㅁm）が挿入されている。これらの鼻音は、当時主にガ行、ダ行の前に存在したと言われる入り渡りの鼻音を示していると思われる。本書のガ行、ダ行には一部の例外を除くすべてにこの表記が使われている。一方、入り渡りの存在がはっきりしないザ行、バ行では一部にしか使われていない。

この濁音の表記を考えると、前述の「2.『んㄴn』でない表記」の「丹後」のㅇŋは、入り渡りを意識した表記のようである。しかし、「吟味」のように鼻音が後続する場合のㅁmは、後続音による逆行同化（唇音化）を強調しているようにも思われる。

本稿では、撥音に濁音、ナ行音、マ行音が後続する語に用いられているㅇ-ㄱŋ-g、ㄴ-ㄷn-d、ㄴ-ㄴn-n、ㄴ-ㅈn-j、ㄴ-ㅅn-s、ㄴ-ㅿn-z、ㅁ-ㅂm-b、ㅁ-ㅁm-

m の表記を「入り渡り＋平音」と呼ぶことにする。ㄴn、ㅿz、ㅁ m は平音ではないが、便宜上このように呼ぶ。

4. 和語

まず、和語の語中の撥音を見る。「入り渡り＋平音」のローマ字の上に・をつける。〈虎〉は虎明本狂言集の例である。各語の前の○で囲んだ数字は和語の通し番号であり、後ろの数字は例の数を示すが 1 例の場合は「1」を省略する。

「ん」がある例

清音：①なんそう난소우 nan-so-’u（何艘）

濁音：②なんひき남비기 nam-bi-gi（何匹）

③なんほう남보우 nam-bo-’u9（なんぼう）

④ねんころ녕고로 nyəŋ-go-ro20（懇ろ）

「ん」がない例

清音：⑤なか난까 nan-gga2（何日）

⑥なと난또 nan-ddo6（何と） 〈虎〉なんとした事ぞ（今参り）

濁音：⑦かかえ강가예 gaŋ-ga-’yəi8（考え）

⑧なくわち낭과지 naŋ-goa-ji4（何月）

⑨まさら만ᅀᅡ라 man-za-ra（満更）

⑩なそ난ᅀᅩ nan-zo2（何ぞ） 〈虎〉なんぞ（節分）

⑪なちやり난쟈리 nan-jya-ri2（何じゃれ）

⑫なとき난도기 nan-do-gi（何時）〈虎〉なんどき（末広がり）

鼻音：⑬なの나ᄔᅩ na-nno（何の） 〈虎〉なんの（武悪）

音注の正確さに比べて仮名は「ん」のない例が目立つ。①～④は仮名遣いが把握されていたようであるが、⑦～⑫は入り渡りと解釈されたのであろう。「⑤何日」「⑥何と」の語末音節が濃音表記[9]（까gga、또ddo）であるが、「～日」（e.g. 九日、十日）のカと、引用のトは重刊本に到るまで原則的に濃音で表記されているから、当然の結果である。しかし、この 2 語 8 例のㄴn に「ん」が当てられていないのは意外である。「⑬何の」のᄔᅩnno は原刊本で多用され、改修を重ねる中で消えていったハングル表記である。

5. 外来語・漢語[10]

語例を見る前に、ガ行音に n-g（ㄴ-ㄱ）と ŋ-g（ㅇ-ㄱ）の 2 つの表記が用いられているので、その使い分けについて述べたい。筆者は音注の制作過程に関して、日本語によく通じた朝鮮の通事の朗読に基づいて制作されたのではないかと想像しているのであるが、その際に漢語を構成する漢字の一つ一つが独立した語として捉えられれば n-g が用いられたのではないかと考えている。ㄴn は語末の撥音を表す文字であるし、平音ㄱg は語頭のカ行、ガ行に使われている。音注を考える際に漢

字が参照できれば、このような表記が取られるかもしれない。その際影響を与えたのは、呉音、漢音ではなく、東音[11] であろう。

一方、漢語全体が一つの語として捉えられた場合は、ŋ-g を用いて後続音の入り渡りを表したのではないか。参照するものがなく聞こえたとおりに表そうとすれば、より表音的な表記になるであろう。

本稿では、語中に撥音を含む語に用いられているㄴ-ㄱn-g、ㄴ-ㄷn-d、ㄴ-ㄴn-n、ㄴ-ㅈn-j、ㄴ-ㅅn-s、ㄴ-ㅿn-z、ㄴ-ㅂn-b、ㄴ-ㅁn-m を便宜上「ㄴn＋平音」と呼ぶことにする。この表記は濁音、鼻音が後続する場合に限り、3. 2 で述べた「入り渡り＋平音」と対立する。「入り渡り＋平音」では後続子音が濁音と鼻音に限られるのに対して、「ㄴ n＋平音」は語の構成要素一つ一つを独立した語と考えるから、後続音は理屈上存在せず、したがって様々な後続音に対応する。歯茎音が後続する表記（ㄴ-ㄷn-d、ㄴ-ㄴn-n、ㄴ-ㅈn-j、ㄴ-ㅅn-s、ㄴ-ㅿn-z）が同じ形を取るため、両表記の使い分けを見る上で重要となるのは、異なる形を取るガ、バ、マ行である。

また、ㄴ-ㄲn-gg、ㄴ-ㄸn-dd、ㅁ-ㅃm-bb の表記は「鼻音（ㄴn、ㅁm)＋濃音」と呼ぶことにする。これはカ、タ、パ行が後続する語に用いられており、「ㄴn＋平音」のㄴ-ㄱn-g、ㄴ-ㄷn-d、ㄴ-ㅂn-b と対立する（ただし清音が後続する場合に限る)。

5. 1　カ行、ガ行が後続する場合

まず外来語、次に漢語を、それぞれ 1. n-g（「ㄴn＋平音」)、2. n-gg（「鼻音（ㄴn、ㅁm)＋濃音」)、3. ŋ-g（「入り渡り＋平音」）の順に提示する。各表記の部分のローマ字の上に・を付す。また、撥音を含む漢字と、撥音の後続音のひらがなに下線を引く。数字は複数例の場合の例数、分数はその語のすべての例に対するその表記例の割合を示す。改修本、重刊本の改修状況は、その語が引き継がれていれば必要に応じて〈改〉〈重〉で示すが、別表現に変えられていたり削除されていれば提示しない。改修状況で「同」とあるのは音注の表記法が同じと言う意味である。〈葡〉は『日葡辞書』、〈文〉は『日本大文典』を示す。同じ語に複数の表記が用いられている場合は、ゴチックで示す。

5. 1. 1　外来語

1. n-g（ㄴ-ㄱ)

釜山浦 6/13：ふさんかい후산가이 hu-san-ga-'i

〈改〉후산까이 hu-san-gga-'i（10 上-16a)

2. n-gg（ㄴ-ㄲ)

釜山浦 7/13：ふさんかい후산까이 hu-san-gga-'i

3. ŋ-g（ㅇ-ㄱ)

前規：せんきう셍규우 zyəiŋ-gyu-'u（2-9a)

〈改〉同：せんき셍기 syəiŋ-gi（2-13a)（前規)

〈重〉센기syəin-gi（2-18a)（先規)

〈葡〉Xenqi 先規.

本稿における外来語とは、当時日朝の人々が使っていた朝鮮語由来の日本語を指す。「ふさんかい」は부산개bu-san-gai（釜山の入り江)、「せんきう」は젼규 jyən-gyu（前規）に由来する。どちらも朝鮮語はㄴ-ㄱn-gであるが、前者は1（n-g）または2（n-gg）で、後者は3（ŋ-g）で表されている。前者は清音で、後者は濁音で取り入れられたのであろう。「前規」は改修本で頭子音がㅅs、語末がŋ-giになり、重刊本で撥音がㄴn、朝鮮語訳が「先規」に改められる。外来語から漢語への修正過程が見られる。

5．1．2　漢語

1．n-g（ㄴ-ㄱ）

【清音】

カ　①南海道：なんかいたう난가이도우nan-ga-'i-do-'u、②遍数：へんかす편간수pyən-gan-su、③臣下：しんか신가sin-ga〈改〉〈重〉신까sin-gga

キ　④天気7/14：てんき뎐기dyən-gi〈重〉뗸끼ddyəin-ggi、⑤三万斤：さんはんきん산빤긴san-mban-gin

クヮ⑥参会：さんくわい산과이san-gua-'i、⑦軍官2：군관gun-goan

コ　⑧先刻：せんこく션고구syən-go-gu

【濁音】

ガ　⑨晩方2：はんかた빤가다mban-ga-da、⑩時分柄：しふんから싀분가라 zi-bun-ga-ra

ギ　⑪難儀：なんき난기nan-gi、⑫慇懃6/9：いんきん인긴'in-gin

⑬本意5：ほんき혼기hon-gi〈改〉同1、ほんい혼이hon-'i4〈重〉ほんい혼이hon-'i5〈葡〉Fon-i.[12)]

グ　⑭日本口5：にほんくち니뽄구지ni-bpon-gu-ji

ゴ　⑮前後1/2：せんこう젠고우zyəin-go-'u〈改〉〈重〉同、⑯文言：もんこん몬곤mon-gon

2．n-gg（ㄴ-ㄲ）

キ　⑰天気7/14：てんき뎐끼dyən-ggi5、뎬끼dyəin-ggi2〈重〉同：뗸끼ddyəin-ggi

3．ŋ-g（ㅇ-ㄱ）

ガ　⑱懸隔：けかく겡가구gyəiŋ-ga-gu〈葡〉Qengacu.

ギ　⑲異議3：いんき잉기'iŋ-gi〈改〉同1：いき잉기'iŋ-gi〈葡〉Igui

⑳慇懃3/9：いんきん잉긴'iŋ-gin〈改〉n-g2〈重〉n-g1

グ　㉑（十）三郡6：さんくん상군saŋ-gun4、しうさんくん싀우상군zi-'u-saŋ-gun2〈改〉同6〈重〉n-g6

ゴ　㉒前後1/2：せんこう젱고우zyəiŋ-go-'u、

㉓丹後：たんこ당고daŋ-go〈改〉同〈重〉n-g

㉔談合4：たんかう당고우daŋ-go-'u3、ndaŋ-go-'u〈改〉同4〈重〉同1〈葡〉Dancǒ

3'. ŋ-ŋg（ㅇ-ㅇㄱ）

ゴ　㉕豊後：ふこ뿡오mbuŋ-ŋgo〈改〉ふこ뿌고mbu-go〈重〉ふこ뿡고mbuŋ-go

m-g（ㅁ-ㄱ）

グァ㉖僉官3：せんくわん셤관syəm-goan〈改〉同3〈重〉同1

5. 1. 2. 1　清音キの「天気」

まず、清音の表記を見てみる。和語では「何日」、外来語では「釜山浦」の半数強の例に2（「鼻音（ㄴn、ㅁm）＋濃音」）が使われていたが、漢語では唯一「④⑰天気」が、その半数の例で2である。陳（2003）は、朝鮮資料で主に平音で表記されている当時の日本語の清音について、「15〜18世紀における語中の「カ行・タ行」の清音は、現代東京方言のようなtenseの破裂音ではなく、例えば「カ行」は音声のレベルでは［g］〜［g̊］の範囲の実現をする音であった（p. 104）」と推測する。現在の東北方言に見られる無声子音の有声音化（「赤」がアガ）現象を考えると実感できるものである。さらにこの現象が撥音の後では無声音のまま（「行火」がアンカ）であることを考えると、「⑰天気」の끼ggiは語末キの子音が有声音化していない、tenseの破裂音であることを表しているのであろう。「天気」は船頭達の口に頻繁に上る、ごく日常的な語である点、漢語というよりも、むしろ和語に近い語感があったのかもしれない。

5. 1. 2. 2　濁音の例

次に濁音について見てみる。漢語は和語と異なり、濁音が後続する語でも1のn-g（「ㄴn＋平音」）の例が多い。1のみで表された例のうち「⑨晩方」「⑩時分柄」「⑭日本口」はともに「音読み＋訓読み」の複合語である。ギの「⑬ほんき혼기hon-gi」5例の朝鮮語訳が「本意」とある。「意」（東音의'ɯi、呉音・漢音イ）と「儀」（東音의'ɯi、呉音・漢音ギ）を混同したのかもしれない。

3のŋ-g（「入り渡り＋平音」）のみで表記された例のうち「⑱懸隔」「⑲異議」は仮名遣いが乱れている。「㉓丹後」「㉕豊後」は巻9の国尽くしに出て来る地名である。

1（n-g）と3（ŋ-g）の両表記が用いられているのが「⑫⑳慇懃」と「⑮㉒前後」の2語である。「慇懃」は6対3で1が多い。

「㉔談合」はキリシタン資料では3拍目が清音であるが、4例すべて3（ŋ-g）で、しかも重刊本まで3が残っているから当時すでに濁音化していたのかもしれないが、あるいは「談」（담dam）を見て、末子音にㄴnがないから3にしてしまった、という可能性もあるかもしれない。本書で東音の末子音がㅁmである漢字にガ行音が続く漢語は「㉑三郡」「㉔談合」「㉖僉官」の3語だけであるが、いずれも音注にㄴnが見られないのである。

3（「入り渡り＋濁音」）は改修を重ねる中で1（「ㄴn＋平音」）に改められている。重刊本まで3のままなのは「㉔談合」の1例と、仮名に「ん」のない「㉕豊後」だけである。

5. 2 タ行・ダ行が後続する場合

タ行・ダ行が後続する例は漢語だけである。タ行の語は1（「ㄴn＋平音」）、ダ行の語は1か3（「入り渡り＋平音」）と分類する。

1. n-d（ㄴ-ㄷ）

タ ①安泰2：あんたい안다이'an-da-'i、②膳退？[13]：しゆんたい순다이syun-da-'i（3-10a）、③端端に3：たんたんに단단니dan-dan-ni、④都船達：とうせんたち도우션다지do-'u-syən-da-ji

テ ⑤淵底：えんてい연뎨이'yən-dyəi-'i、⑥心底：しんてい신뎨이sin-dyəi-'i

ト ⑦陰徳：いんとく인도구'in-do-gu

1か3. n-d（ㄴ-ㄷ）

ダ ⑧難題：なんたい란다이ran-da-'i

ド ⑨今度7：곤도gon-do、⑩先途4：せんと션도zyən-do 션도syən-do2 젼도jyən-do、⑪筑前殿3：ちくせんとの지구션도노ji-gu-syən-do-no、⑫安堵2：あんとう안도우'an-do-'u、⑬山陰道：さんいんたう산인도우san-'in-do-'u、⑭東山道：とうさんたう도우산도우do-'u-san-do-'u、⑮船頭3：せんとう션도우syən-do-'u

1. n-j（ㄴ-ㅈ）

チ ⑯天地：てんち뎐지dyən-ji

チュ ⑰館中3：くわんちう관쥬우goan-jyu-'u

⑱諸代官中：しよたいくわんちう쇼다이관쥬우syo-da-'i-goan-jyu-'u

⑲船中2：せんちう션쥬우syən-jyu-'u〈葡〉Xenchǔ、

ツ ⑳半月：はんつき환주기hoan-ju-gi

1か3. n-j（ㄴ-ㅈ）

ヂ ㉑心中6：しんちう신쥬우sin-jyu-'u〈葡〉Xingiǔ

ヂョ ㉒頑丈：かんちやう간죠우gan-jyo-'u

デ ㉓当年条：たうねんてう도우년죠우do-'u-nyən-jyo-'u

5. 3 ナ行が後続する場合

ナ行も漢語のみである。「①檀那」の仮名に「ん」がない。

1か3. n+n（ㄴ-ㄴ）

ナ ①檀那2：たな단나ndan-na（7-6b）（7-8b）[14]、②案内7：あんない안나이'an-na-'i

ニ ③堪忍3：かんにん간닌gan-nin、④（十）二三日9：（しう）にさんにち（시우）니산니지（zi-'u-）ni-san-ni-ji、⑤官人：くわんにん관닌goan-nin、⑥今日12：こんにち곤니지gon-ni-ji

ネ ⑦今年：こんねん곤년gon-nyən、⑧近年：きんねん긴년gin-nyən、⑨千年：せんねん셴년syəin-nyən

ノ ⑩筑前の守2：ちくせんのかみ지구션노가미ji-gu-syən-no-ga-mi

5. 4 サ行・ザ行が後続する場合

5. 4. 1 外来語

1. n-s（ㄴ-ㅅ）

信使：しんす신수sin-su29、判事：はんす환수hoan-su10

1か3. n-z（ㄴ-ㅿ）

正官じ：しやうくわんし쇼웅관ᅀᅵsyo-'uŋ-goan-zi8、쇼우관ᅀᅵsyo-'u-goan-zi(2-5a)

「信使」「判事」の東音は신ᄉᆞsin-sɐ、관ᄉᆞ pan-sɐで語末母音が、ɐである。この文字の音はもともとはΛに近かったのが、16世紀には非語頭でiに変化していたというが、本書ではᄉᆞsɐが非語頭につく4語の外来語中、3語はウ段の「す」になっている[15]。「信使」は巻7に「しんし신시sin-si」という漢語の例が3例みられる。一方、「判事」に漢語の例はない。

5. 4. 1. 1 「正官」と「正官じ」

「正官」には上述の「しやうくわんし」の他に「しやうくわん」という形も見られ、どちらも9例ずつ計18例見られる。筆者はこれを外来語と漢語のペアであろうと考えている。では、この2つの形に意味の違いはあるだろうか。また、「正官じ」の「じ」は何に由来しているのだろうか。

まず、意味の違いについて考えてみよう。「正官」と「正官じ」の現れ方は、原刊本とそれ以降（改修本、重刊本）とで異なっている。改修本以降の使い分けを見ると、「正官じ」と呼ぶ場合には敬意が含まれているようであるが[16]、原刊本ではそのような使い分けは見られない。以下に原刊本でこの2語の出て来る18例をすべて列挙する。漢語は四角で囲み、外来語は下線を引く。

なお、東萊府使は朝鮮の地方長官、釜山僉使はその管轄下の陣営の武官、正官は対馬から朝鮮に定期的に派遣されていた使節団（送使）の団長、倭館は釜山にあった日本人使節接待のための公館のことである。

(対馬の送使船を朝鮮の役人が出迎える際の会話)

1. 朝鮮側：正官（1-15a）は誰で御座るか。
2. 朝鮮側：正官（1-15b）はどこに御座るか。
3. 送使側：正官（1-15b）は船気にて／正体なく下に伏しまるした。

(釜山の倭館で朝鮮の役人が送使側の役人に)

4. 朝鮮側：今正官（1-23a）見舞いに行きまるする程に／重ねて見まるせう。
5. 送使側：正官じ（1-23a）へ身も人を遣りまるせう程に／こなたも小通事を先に遣ってみて御座れ。

(朝鮮の役人と送使側の役人が接待行事の打ち合わせをする会話)

6. 送使側：ただし正官じ（1-27b）総じて病気な人で御座ったに／何とやら来ると否や／また気相気で／食い物もえ食わず伏せっていまるする程に
7. 朝鮮側：正官じ（1-28b）の気相も存ぜず／送使に差しあいないように申して明日定めに。
8. 朝鮮側：今になって正官じ（1-29a）の気相とおしらる程に。

9. 朝鮮側：正官じ（1-29a）出でられずば／我等不調法は申し分けられん程に
10. 朝鮮側：たとえ正官じ（1-29b）御気相に御座るとも
11. 日本側：正官じ（1-30a）昨晩より患い付いた程に
12. 日本側：正官（1-30b）気色が／堪忍なるべき程ならば

(接待の席で東萊府使と送使側の役人の会話)

13. 東萊府使（上位)：正官（2-1b）を珍しう見まるせうかと思うたが
14. 送使側（下位)：正官（2-4a）は島より来る時から
15. 送使側（下位)：今日はこのようにあしらわしらるを／行って正官じ（2-5a）に申したらば／御目に掛からんをいこう悲しう存じまるして

(銅錫の公貿易の日、釜山僉使が送使側の役人に挨拶する)

16. 釜山僉使（上位)：聞きまるすれば正官じ（2-17a）がようなったと申す程に

(銅錫の公貿易の翌日、朝鮮の役人が対馬の役人に、東萊府使と釜山僉使の言葉を伝える)

17. 朝鮮側：東萊釜山浦より／正官（3-27a）と都船たちの様体が／常のみならず／奇特な挨拶を／皆よう召さると褒めさしらる程に

(木綿の公貿易の日、朝鮮の役人が正官に注文を付ける)

18. 朝鮮側：さて今日は右の道理を／正官（4-3a）も／御分別あって

全体を見ると、例 1～4 は正官、5～11 は正官じ、12～14 は正官、15・16 は正官じ、そして 17・18 は正官である。その傾向を大別すると、フォーマルな話では正官、個人的な話になると正官じとなっているように思われる。そうであるならば、「正官」が一般的な役職名であるのに対し、「正官じ」のほうは対馬から送使の正官として来朝した具体的な人物そのものを指しているのではないだろうか。

1～3 は入国手続きの会話であり、正官はあくまでも送使のトップの役職名であろう。4 は微妙だが、送使の世話係の役人が正官を見舞うのは仕事であり、しかも正官とまだ一度も言葉を交わしていない様子だから、単に役職名と考えてもいいかもしれない。しかし、一旦見舞って知り合えば、次からは「あの正官」を念頭に置いて送使側と話を進めるであろう。それが 5～11 のやり取りに出て来る「正官じ」なのではないか。12 は「正官じ気色」となってもよさそうだが、「正官気色」で一語なのかもしれない。13・14 の東萊府使・釜山僉使臨席の茶礼ではまた「正官」となるが、15、16 では病気の正官の個人的な話になっている。そして 17・18 はフォーマルな言葉である。

5. 4. 1. 2 「しんし」と「しんす」

次に「信使」の使い分けを見てみよう。原刊本においては巻 7 を除くすべての例が「しんす」となっているが、巻 7 だけは 6 例が「しんす」、3 例が「しんし」で、2 つの形が混在している。

1. (筑前守の使→通信使：筑前守の言葉の引用)
   筑前の守申し置きまるする所は／「しんし（7-4b)、御通りの刻み／何卒ご馳走申し上ぐる様に」／固く申されたれども

2. 3.（地の文）
しんす（7-9a）吉田へ御泊まりの時／太守（対馬守）と昭長老が見舞いにて／しんす（7-9b）へ申す様は

4. (対馬守と昭長老→通信使)
江戸よりしんす（7-9b）の問安に／歴々の侍二人／三島まで待つと申す程に

5. 6.（対馬守→通信使)
また、あの使がしんす（7-11b）を敬って／装束をするならば／しんす（7-12a）も装束を召さしられてよう御座るやら

7. （地の文）(奉行→通信使：将軍の伝言）関白（将軍）より奉行を以って／しんし（7-15a）へ／「何事なうこれまで着かしられて…

8. (対馬守→通信使：将軍の伝言）上（将軍）より「明後日は吉日じゃ程に／しんし（7-18a）へ御対面の様子を／直に参って左右を申し入れ」とある儀でこそ御座る。

9. (対馬守→通信使：奉行の言葉の引用)「御進物もお城へ上がらしらる日／先へ持たせて並べ立てた後に／しんす（7-20b）が御座る様にしたらばよそうな」と（奉行達が）申す程に

四角で囲んだ「しんし」に注目すると、1の筑前守、7と8の将軍はいずれもまだ通信使に会ったことがない[17]。一方、「しんす」と呼ぶ対馬守、昭長老は通信使と近い関係であるし、9の奉行達も通信使の江戸到着後は対馬守とともに将軍との仲介役をしている人達である。原刊本の上記9例はもともと「しんし」であったのを、後から6例「しんす」に修正したものであるが、1、7、8の3例を「しんす」に修正しなかったのは、「しんす」は特定の人物を指す、親しみのこもった呼び方という意識があったからではないだろうか。「しんす」は改修本以降「しんし」に改められ、重刊本では「しんす」は残らず消えている。

5. 4. 1. 3 「正官じ」の由来

では、「正官じ」の「じ」(しᅀᅵzi）は何に由来するのであろうか。本書には韓国語に由来する外来語がいくつか見られるが、末子音ㅇŋの表し方は次のようである。

大庁대텽dai-tyəŋ ⇒ たいてき다이뎡기da-'i-dyəiŋ-gi（2-11b）他 2
特送특송tɯg-soŋ ⇒ つそき죽송기jug-soŋ-gi（1-10a）他 1
つくそき주구송기ju-gu-soŋ-gi（1-8a）他 3[18]

2例とも「語中の濁音」ŋ-gで表したギを語末に加えている。その理由は韓国語の末子音ㅇŋが日本語のガ行の入り渡りの鼻音と似ていたからであろう。同様に語末の末子音ㄴnを表そうとするならどうなるであろうか。原刊本においてはダ行の前で入り渡りを示すㄴ nがコンスタントに現れているから、語末にヂを加えれば「쇼웅관지syo-'uŋ-goan-ji（正官ぢ)」となる。ところで、次節の「案じて」に「①あちて안지뎨'an-ji-ddyəi」と「⑦あして안ᅀᅵ뎨'an-zi-ddyəi」の2つの表記が見られるように、撥音に続くヂとジは当時も実際には同じ音であったと思われる。

そのため、「正官ぢ」という音を聞いてハングル化しようとした朝鮮の教材制作者は、쇼웅관시 syo-'uŋ-goan-zi の方を選んでしまったのではないだろうか。

同じ「官」の付く役職名でも「代官」は大勢いたから、一人の人物を指して「代官」と呼ぶことはなかったであろう。外来語と漢語のペアを持つ「信使」と「正官」に使節団のトップという共通点がある点で、ともに役職を指す場合と具体的な人物を指す場合を区別することが多かったのであろう。

5．4．2　漢語

以下に漢語の語例を提示する。必要に応じて、「原刊本→改修本」「原刊本→改修本→重刊本」の順番で改修状況を示す。

5．4．2．1　n-j（ㄴ-ㅈ）の語例

1か3．　n-j（ㄴ-ㅈ）

ジ　①**案じて** 1/2：あんちて안지뎨'an-ji-ddyəi（4-24a）→同→同、
②悋文字：りもんち리몬지ri-mon-ji（9-5b）→りもし n-z〈葡〉Comoji（小文字：小麦の女房詞）、③肝腎간진gan-jin（9-11a）、

ジュ④多人数：たにんちう다닌쥬우da-nin-jyu-'u4→たにんす n-z4→同3〈葡〉Taninju

ジョ⑤難所[19] 2：らんちやう란죠우ran-jyo-'u〈葡〉Nanjo

四つ仮名の混同のようにも見えるが、撥音に後続していることがより大きな混同の原因であろう。「④多人数」は当時の日本語の音がタニンジュだったためか、朝鮮語訳に「多人中」と漢字が当てられている。「①案じて」は重刊本に到るまで修正されていない。

5．4．2．2　ㅿzとㅅnの使い分け

次にn-z（ㄴ-ㅿ）とn-s（ㄴ-ㅅ）の例を提示する。

1か3．n-z（ㄴ-ㅿ）

【清音】

ス　⑥**金子** 1/3：きんす긴수gin-zu（8-2a）→同→同〈葡〉Qinsu.

【濁音】

ザ　⑦円座：えんさ연ᅀᅡ'yən-za

ジ　⑧**案じて** 1/2：あして안ᅀᅵ뎨'an-zi-ddyəi（8-8a）、⑨感じ：かし간ᅀᅵgan-zi（1-22a）（3-16a）かんし간ᅀᅵgan-zi（9-14b）、⑩進じ2：しんし신ᅀᅵsin-zi、신ᅀᅵzin-zi、⑪**存じ** 46/47：そんし손ᅀᅵzon-zi 39、御そんし오손ᅀᅵŋgo-zon-zi7、⑫存じ前：そんしまえ손ᅀᅵ마예zon-zi-ma-'yəi、⑬単子：たんし단ᅀᅵdan-zi、⑭**晩じ** 2：はんし빤ᅀᅵmban-zi、⑮返事10：へんし편ᅀᅵpyən-zi、⑯万事9：はんし빤ᅀᅵmban-zi 3、まんし만ᅀᅵman-zi 6、⑰御覧じ11：御らんし오론ᅀᅵŋgo-ron-zi〈葡〉Goranji、Gorǒji

ズ　⑱**存ず〜**1/11：そんす〜손수zon-zu（6-10b）

ゼ　⑲存ぜん：そんせん손션zon-zyən

1．n-s（ㄴ-ㅅ）

サ　⑳懇札：こんさつ곤삳gon-sad

シ　㉑三使 8：さんし산시san-si、㉒信使 3：しんし신시sin-si、㉓斟酌 10：しんしやく신샤구sin-sya-gu、㉔都船主：とうせんしゆ도우션슈do-'u-syən-syu、㉕尊書 2：そんしよ손쇼zon-syo、㉖返書 2：へんしよ편쇼pyən-syo

ス　㉗**金子** 2/3：きんす긴수gin-su（8-4a）→同→ n-z

　　　　　　　　　　　　　　　　　　（8-18b）→同

　　㉘反する：はんする환수루hoan-su-ru、㉙番する：はんする반수루ban-su-ru

セ　㉚宴席 8：えんせき연셰기'yən-syəi-gi6、연셔기 'yən-syə-gi2

ソ　㉛三艘 2：さんそう산소우san-so-'u

1か 3. n-s（ㄴ-ㅅ）

ジ　㉜参じ：さんし산시san-si（8-26a）→ n-zi

　　㉝**存じ** 1/40：**そんし**손시zon-si（10-2a）→ n-zi

　　㉞**晩じ** 1/2：**はんし**뺀시mban-si（10-20a）→ n-zi

ジョ㉟参上：さんしやう산쇼우san-syo-'u（10-1b）→ n-zyo-'u

　　㊱面上：めんしやう면쇼우myən-syo-'u（10-4a）→ n-zyo-'u

ズ　㊲感ずる：かんする간수루gan-su-ru（7-21b）

　　㊳**存ず〜**10/11：そんす〜손수zon-su

ゼ　㊴進ぜう：しんしやう신쇼우sin-syo-'u（5-27b）→同

ゾ　㊵満足 2：만소꾸man-so-ggu（5-28b）→만소구man-so-gu

n-z（ㄴ-ㅿ）の例を見てみよう。ㅿz はほとんどがザ行に対応しているが、唯一「⑥金子」の 3 例中 1 例がᅀᅮzu で表されている。日葡辞書等では清音であるから、「子」の東音ᄌᆞjɐに拠った可能性がある。本書では、ɐ はウ段で、ᅎj はㅿz で表記される傾向があるのである[20]。ただし、重刊本になると⑥だけでなく㉗の 1 例も n-z に改められているから、あるいは本書の拠った日本語では濁音だったとも考えられる。

n-s（ㄴ-ㅅ）の例は、サ行に多く対応しているが、一方でザ行の例もある。ジ、ジョでは 5 語 5 例あるが、各語 1 例ずつであり、改修本ですべてㅿz に改められている。一方、ズでは「㊲感ずる」が 1 例、「㊳存ず〜」は 10 例もある。その改修状況は以下のようである。

感ずる：간수루gan-su-ru（7-21b）→간ᅀᅵ gan-zi

存ず〜：손수zon-su（4-2b）他 5 →손ᅀᅵzon-zi

　　　：손수zon-su（4-21a）→同→同

　　　：손수zon-su（10-6b）→同→손ᅀᅵzon-zi

　　　：손수zon-su（10-17a）→손ᅀᅵzon-zi →손스루zon-sɯ-ru

　　　：손수zon-su（8-7a）

「存ずる」の 4-21a は重刊本に至るまで n-s であるし、10-17a は改修本で一旦「存じ」とされたのが重刊本に至って再び n-s になっている。これらの改修を通してㅿz に改められた例はすべてᅀᅵzi に改められているのであり、ᅀᅮzu に改められた例は 1 例もない。この状況を見ると、ズにㅅs を当てたのには理由がありそうであ

る。撥音に続くズは破擦音として実現するであろうから、ㄴ수n-su とは実際にはㄴ추n-cu だったのではないだろうか[21)]。そうであれば、音注制作者の耳にㄴ주n-ju と聞こえればㄴᅀᅮn-zu で、ㄴ추n-cu と聞こえればㄴ수n-su で表したのであろう。

ゾの「㊵満足」も 2 例とも n-s で、ㅿz に改修されたものはない。感情を込めて強く言うなどして有気音となり、ㄴ초n-co のように聞こえたのかもしれない。

5. 5 パ行・バ行・マ行が後続する場合

5. 5. 1 外来語

2. m-bb（ㅁ-ㅃ）

看品 9：かんほく감뽀구gam-bbo-gu〈重〉간ᄞᅩ구gan-mbo-gu

「かんほく」は간품gan-pum に由来すると一応考えられている。小倉・河野(1986) に「朝鮮字音の轉であらう」(p. 421) とあり、浜田 (1963) も「少なくとも原刊本に見える形は、たとえ鼻音に接しても、「連濁」しない有気音 p‘ を持つ朝鮮漢字音「品」の干渉が、認められるという意味では、朝鮮語よりの一種の外来語と考えることもできるであろう (浜田 1970：p. 108)」と述べているが[22)]、품pum からどのようにして「ほく」の「く 구gu」が導き出されたのかは謎である。浜田(1963) は、あくまでも一つの遁げ道に過ぎないと断りつつ、同義の「看色」(간색gan-saig) の干渉によって成立したのかもしれないと述べている (浜田 1970：p. 100)。しかし、「看品」とは公貿易品の品質の鑑別式のことであり、日朝貿易に携わる通訳官たちにとっては重要な語彙なので、間違った形で定着し長期間使い続けられるというのも納得できない。

さて、「かんほく」の音注は m-bb（ㅁ-ㅃ）である。2（「鼻音（ㄴn、ㅁm)＋濃音」）は、カ行の「何日」「天気」「釜山浦」やタ行の「何と」にも見られたが、その場合の撥音はㄴn で表された。「かんほく」の撥音に両唇音ㅁm が用いられているのは後続音からの逆行同化が表されているようである。一方、カ行の例はㅇ-ㄲŋ-gg でなくㄴ-ㄲn-gg であるが、それは当時のガ行に入り渡りが付き物であったため、清音の直前にㅇŋ を用いることができなかったのであろう。しかし、バ行音の場合は入り渡りがほとんど現れなかったため、半濁音の直前でㅁm を使っても問題がなかったと思われる。

5. 5. 2 漢語

5. 5. 2. 1 パ行・バ行の例

〈倭〉は『倭語類解』の例であることを示す。『日葡辞書』はすべて-np-、-nb-であるが、『日本大文典』では-mp-、-mb-の表記が目立つ。

1. n-b（ㄴ-ㅂ）

パ ①巡杯：しゆんはい슌바이syun-ba-’i、②面拝：めんはい면바이myən-ba-’i〈葡〉Menpai〈文〉Mempai

ピ ③御伝筆：御てんひつᅌᅩ뎐비쭈ŋgo-dyən-bi-jju

バ ④関白：くわんはく관바구goan-ba-gu〈倭〉下 50b 관ᄞᅡ구goan-mba-gu

〈葡〉Quanbacu〈文〉Quambacu、⑤三番さんはん산반san-ban

ブ　⑥今年分：こんねんふん곤년분gon-nyən-bun

1’. n-mb（ㄴ-ᄜ）

バ　⑦今晩：こんはん곤ᄜᅢᆫgon-mban（10-22a）→こんまん곤만gon-man→n-mb

⑧三万斤：さんはんきん산ᄜᅢᆫ긴san-mban-gin（10-26a）→同→さんまんきん산만긴san-man-gin

⑨万万：はんはんᄜᅢᆫᄜᅢᆫmban-mban（10-10a）→まんまん만만 man-man

ブ　⑩順風：しゆんふう슌ᄜᅮ우syun-mbu-’u（5-18a）→同→同（6-14a）→슌부우syun-bu-’u→n-mb

〈倭〉上 1b 슌ᄜᅮ우zyun-mbu-’u〈葡〉Iunpǔ

ボ　⑪**面目** 1/3：めんほく면ᄜᅩ구myən-mbo-gu（5-8a）→同

〈葡〉Menmocu：顔　Menbocu：名誉〈文〉Membocu、Menbocu

3. m-b（ㅁ-ㅂ）

バ　⑫丹波：たんは담바 dam-ba→同→n-mb〈文〉Tamba

ブ　⑬膳敷：せんふ셈부zyəim-bu→同→同

⑭半分 2：はんふん홤분hoam-bun→n-b→n-mbun

べ　⑮分別 4：ふんへつ훔베쭈hum-byəi-jju、御ふんへつ옥훔베쭈ŋgo-hum-byəi-jju、

ふんへつ훔벼쭈hum-byə-jju（4-16b）→同

御ふんへつのまえ옥훔베쭈노마예ŋgo-hum-byəi-jju-no-ma-’yəi（4-26b）→同→n-b　〈葡〉Funbet〈文〉Fumbet、Funbet

3’. m-mb（ㅁ-ᄜ）

バ　⑯千万：せんはん셤ᄜᅢᆫsyəm-mban（10-9a）→せんまん셤만syəm-man

ブ　⑰三奉行：さんふきやう삼ᄜᅮᆼ교우sam-mbuŋ-gyo-’u（7-22a）→同

バ行の表記にᄜmb が見られる。「⑦今晩」「⑧三万斤」「⑨万万」「⑩順風」「⑪面目」「⑯千万」「⑰三奉行」である。ᄜmb は特定の漢字の頭子音に多く用いられている。語頭の平音ㅂb に鼻音ㅁm を添加して有声音であることを強調した表記であろう[23)]。

「順風」の 3 拍目は、『日葡辞書』では pǔであるが、重刊本も倭語類解もᄜᅮmbu なので、この方言においては濁音だったのであろう。

「面目」はボかモか微妙なので、次のマ行の例も含めて全 3 例とした。

5. 5. 2. 2　マ行の例

1. n-m（ㄴ-ㅁ）

マ　⑱万万 2：まんまん만만man-man→同

ミ　⑲**珍味** 1/2：ちんみ진미jin-mi（9-8b）→同→同

メ　⑳日本めいて：にほんめいて니혼메인데ni-hon-myəi-’in-dyəi

㉑神妙：しんめう신묘우 sin-myo-’u（9-18b）→同〈葡〉Xinbeô〈文〉

Ximbeô、Xinbiô

モ　㉒御進物 2：御しんもつ어신모쭈ŋgo-sin-mo-jju →同〈葡〉Xinmot〈文〉Ximmot

㉓日本者：にほんもの니혼모노ni-hon-mo-no

㉔封進物 2：ふうしんもの후우신모노 hu-'u-sin-mo-no →同→同

㉕**面目** 1/3：めんもく면모구myən-mo-gu（7-6b）→同

ミョ㉖今明日中 2：こんみやうにちちう곤묘우니진쥬우gon-myo-'u-ni-jin-jyu-'u

3．m-m（ㅁ-ㅁ）

ミ　㉗**珍味** 1/2：ちんみ진미jim-mi（7-3a）→ n-m →同

㉘吟味：きんみ김미gim-mi → n-m

㉙半道：はんみち황미지hoam-mi-ji →同〈葡〉Fanmichi〈文〉Fammichi

モ　㉚見物 4：けんもつ겸모쭈gyəm-mo-jju（8-10b）（8-11b）→けんふつ겜부쯔 gyəim-bu-jjɯ（8-28a）→けんふつ겜뿌쯔gyəim-mbu-jjɯ→ n-mb

けんもつにん겸모쭈닌gyəm-mo-jju-nin（5-23a）→けんふつにん겜뿌쯔닌gyəim-mbu-jjɯ-nin〈葡〉Qenbut〈文〉Quembut、Que~but

㉛**面目** 1/3：めんもく몀모구myəm-mo-gu（7-22a）

「㉚見物」は原刊本では4例すべて「けんもつ겸모쭈gyəm-mo-jju」となっているが、改修本からブに改修されている。

バ行もマ行も、改修を重ねる中で1（「ㄴn＋平音」）に改められている。重刊本まで3（「入り渡り＋平音」）のままなのは、バ行の「⑬膳敷」だけである。

5．5．2．3　ㄴnとㅁm

バ行の「⑥今年分」、マ行の「⑳日本めいて」「㉓日本者」「㉔封進物」「㉖今明日中」の計5語は複合語でㄴnである。一方、地名「⑫丹波」と外来語「看品」はㅁmである。

そこで、ㄴnの例から語中に境界がある上記5語を除き、ㅁmの例から地名（丹波）と外来語（看品）を除いてみると、以下のようである。

ㄴn：関白、三番、今晩、三万斤、万万、順風、**面目**、**珍味**、神妙、進物

ㅁm：膳敷、半分、三奉行、分別、千万、**珍味**、吟味、半道、**面目**、見物

ㅁmの語は、撥音に接する母音に狭母音がやや多いように思われる。

6．結論

本研究から得た結論は以下のとおりである。

イ．語末の撥音はすべて「んㄴn」で表記されている。この文字は概念上の撥音表記であり、実際の音との関連はないと思われる。

ロ．語中の撥音を表す音注には、次の3種類がある。その用いられ方は、語種に

よって偏りがある。：の後は撥音の後続音。

1.「ㄴn＋平音」ㄴ－ㄱn–g、ㄴ－ㄷn–d、ㄴ－ㅈn–j、ㄴ－ㄴn–n、ㄴ－ㅅn–s、ㄴ－ㅿn–z、ㄴ－ㅂn–b、ㄴ－ㅁn–m：カ、タ、ナ、サ、パ、マ行、濁音

2.「鼻音（ㄴn、ㅁm）＋濃音」ㄴ－ㄲn–gg、ㄴ－ㄸn–dd、ㅁ－ㅃm–bb：カ、タ、パ行

3.「入り渡り＋平音」ㅇ－ㄱŋ–g、ㄴ－ㄷn–d、ㄴ－ㅈn–j、ㄴ－ㄴn–n、ㄴ－ㅅn–s、ㄴ－ㅿn–z、ㅁ－ㅂm–b、ㅁ－ㅁm–m：濁音、ナ、マ行

1は主に漢語に用いられている。これは構成要素の漢字一つ一つを独立した語と捉えた表記法であろう。清音、濁音、半濁音、つまり様々な音が後続する場合に用いられている。

一方、2と3は、主に和語、外来語に用いられる。全体を一つの語と捉えたより表音的な表記法で、非有声音化（カ、タ、パ行が後続する場合）、入り渡り（ガ、ダ、ザ行が後続する場合）、逆行同化（バ、マ行が後続する場合）などを表していると思われる。

ハ．複合語の前項の撥音は1で表記されている。地名は3で表記されている。また、「ん」の仮名遣いから見て漢語が把握されていないと思われる語も3で表記されている。

ニ．ガ行とバ行にはㅇ－ㆁㄱŋ–ŋg、ㄴ－ㅲn–mb、ㅁ－ㅲm–mbも見られるが、後続音に使われている語頭子音群ㆁㄱŋg、ㅲmbは特定の漢字に当てられており、撥音の表記に影響は与えていないであろう。

ホ．改修状況は、3の例は重刊本に到る間にほとんどが1に直されている。2の例は語数が少ない上、重刊本まで同じ語形で引き継がれた語は「天気」1語のみである。「天気」は原刊本では1と2が半々だったのが、重刊本ですべて2に統一されている。

ヘ．「正官じ」は정관jyəŋ–goan（正官）に由来する外来語であり、末子音ㄴnを日本語化するために濁音ヂの入り渡りを利用したが（正官ぢ）、それを朝鮮の教材制作者がハングル化するときに「しやうくわんし쇼웅관ᄉᆡsyo–’uŋ–goan–zi」としたのではないかと推測する。もしそうであるならば、漢語「正官」の撥音はすでに舌音性を失っていたと考えられるであろう[24]。

謝辞

本稿の執筆に際して、麗澤大学名誉教授梅田博之先生より貴重なご意見をいただきました。改めて感謝申し上げます。

註

1）ただし、巻10（書簡文）では書き言葉的な語彙に末子音ㄷdの表記が見られる（e.g. 一筆읻빋’id–bid）。なお、ハングルのローマ字転写は河野（1955）p. 367に拠る。

2）浜田（1955）は、語末の促音/T/はこれと相関する撥音/N/の支えによって存在し得たと指摘している（p. 89：4–18、p. 93：16～p. 95：10）。/T/と/N/の相関とは、どちらも規範的には同じ調音点（歯茎）を持つ、という意味であろう。

3）資料として鄭光編著『原刊活字本捷解新語』（弘文閣）を用いた。これはソウル大学奎章閣所蔵本1638号の影印本である。

4） 土井訳註（1955）p. 636 に拠る。「べけんや」は和語の例である。その他すべては舌内入声の例であるが、すでに舌内入声と唇内入声の区別が失われていた時代であるから、唇内入声の後でも同様の連声現象が起きていたと思われる。

5） 以下、ソウル大学奎章閣所蔵本 1638 号を本書と呼ぶ。

6） 5–20a は巻 5 の 20 帳表を、b は裏を意味する。帳数は文であれば文頭、語であれば語頭の位置で表示する。

7）「対面成らば」（対面が実現したら）という解釈もある。しかし、「分別ならんでかなわん事は」（4–16b）「堪忍なるまい事は」（4–24b）「差引きなりまるせん事で」（6–12a）のように「成る」は実現の難しいことに対して使われているのに対して、ここでは接待係の役人が使節に対面するのであり、対面は当然のことであるから、「対面あらば」（対面したら）と解釈する方が適当と思われる。本書では、やや敬意の低い「油断ある」「呼びある」「残しある」、敬意の高い「思しある」「御分別ある」「御渡海ある」等も見られる。なお、朝鮮語訳は重刊本まですべて「對面ᄒᆞ면」、日本語は改修本から「対面さっしゃれたらば」と改められている。

8） 例外は「たんかう당고우daŋ-go-’u（談合)」と「かんほく감뽀구gam-bbo-gu（看品)」である。「談合」は江戸時代までは 3 拍目が清音であったと考えられている。

9） 梅田（1977）には韓国語の 3 種類の子音の特徴が以下のように説明されている。(pp. 8–9)
　　濃音：語頭、語中ともに無声音で実現、声帯の完全な閉鎖、声帯の高い緊張、破裂前の声門下圧の高まり
　　激音：語頭、語中ともに無声音で実現、声帯の広い開放、高い声門下圧
　　平音：語頭は無声音、語中は有声音で実現、上記のすべての特徴において unmarked
　現代語の語中の清音は韓国人には濃音と聞き取られやすいようである。

10) 漢語と和語の複合語もあるが、撥音の部分が漢語であれば、すべて漢語の例に分類した。

11) 伝統的な朝鮮漢字音のこと。

12) 日葡辞書には Fon-i（本意：本来の道理）の他に Fongui.（本儀：本来の事、あるいは、正規の事）もあるが、原刊本の朝鮮語訳が「本意」となっていること、重刊本ですべて「ほんい혼이hon-’i」に訂正されていること、日葡辞書の Fon-i の例にある Fon-iuo somuqu（本意を背く）が原刊本でも見られることから、やはり Fon-i であろう。「ほんきおそむきた」(3-2a)、「ほんきそむきに候」（10–2b）（10–34b）

13) 解釈が難しいが、『倭語類解』（司訳院編纂の日本語の辞書。18 世紀初頭頃成立）上 42b の「膳退셴다이syəin-da-’i すべる」が音も意味も近いように思われる。

14) （7–6b）はもともと따낭dda-naŋ であったのが修正されたもの。（7–8b）は修正されてはいないが、異本（東大小倉文庫所蔵本）に挿入された別版には dda-nnaŋ とある。安田（1990）p. 70、p. 104、金（2008）p. 71、p. 78 参照。

15) ウ段：信使、判事、差使員（さいすえん사이수연sa-’i-su-’yən 4–2a）
　　ア段：送使（そさ소사so-sa 1–20b 他）

16) 改修本と重刊本で唯一現れ方が違っているのは「正官は（2–4a）→正官には（2–5a）→正官じは（2–11a）」の一箇所である。改修本の「には」に含まれる敬意が重刊本の「正官じ」につながったのかもしれない。なお、重刊本の本文を草書体の漢字仮名混じり文に改めた『捷解新語文釈』（1796）では「正官」「正官人」で書き分けられている。

17) 通信使が筑前守の使に、「江戸に着いたら筑前守にお礼を言おう」（7–7b〜7–8a）と言っていることから、筑前守はこの時参勤交代で江戸に滞在していたことが窺える。

18) この 2 語 9 例の他、房방（部屋）に由来すると思われる「はかい황가이hoaŋ-ga-’i」(1-24a）他 2 例もある。ギを付けるなら「はき황기hoaŋ-gi」となるはずであるが、何故かガイが付いている。一方、末子音 r や g を表す時は母音イを挿入している。
　과줄（揚げ菓子）→くわつり과주리goa-ju-ri（2–8a）他 1
　공무역（公貿易）→こむえき공무예기goŋ-mu-’yəi-gi（3–21b）他 2
　　　　　　　　　　こうむえき고우무예기go-’u-mu-’yəi-gi（4–2b）

19) 解釈が難しいが、朝鮮語訳が「험ᄒᆞ海路」（8–12b）、「험ᄒᆞᆫᄃᆡ」（8–21b）とあるので、意味と音両面を考えると、「難所」（Nanjo）ではないかと思われる。「難題」を「なんたい란다이ran-da-’i」（4–25b）とした例もある。

20) ㅈj とㅿz については中山（2004）pp. 72–75 で言及した。

21) 李（1975）は 18 世紀のㅈj とㅊc が i、y の前では口蓋化音として、他の母音の前では歯音として発音されていたとしている（p. 224)。そうであれば、주ju と추cu、조jo と초co はまだ口蓋化しておらず、［tsu］と［ts^hu］、［tso］と［ts^ho］になる。

22)　森田（1957：p. 23）はㅃbb について「訓民正音」で並母の字音を写すのに用いられているから［b］を示しているであろうとしたが、浜田（1970：p. 103）はㄲgg、ㄸdd、ㅆ ss が濁音でないことを示していると思われるのに、ㅃbb だけ［b］とするのは「きわめていぶかしいと云わなければならない」(p. 103：14）と指摘している。

23)　同様の表記がガ行、ダ行にも見られる。

ガ行　오ᇰŋgo：御座る／御〜、五、鶏子（カイゴ)、요ᇰŋgyo：御意

ダ行　딴ndan：檀那、또ndo：道具、どこ、どち、どう

この他、「筑後」「豊後」「肥後」(9–27 のみ)、「談合」、助動詞「べき」などもある。

24)　本稿は 2010 年 11 月 13 日（土）に麗澤大学で行なわれた日韓言語学者会議で発表した論文を修正補完したものである。

参考文献

李康民（1991)「『捷解新語』の成立と表現」『国語国文』60–12 京都大学国文学会

李基文著、藤本幸夫訳（1975)『韓国語の歴史』大修館書店

池田廣司・北原保雄（1972)『大蔵虎明本狂言集の研究本文篇上』表現社

池田廣司・北原保雄（1973)『大蔵虎明本狂言集の研究本文篇中』表現社

井上史雄（1968)「東北方言の子音体系」『言語研究』52　日本言語学会

林昌奎（2000)『「捷解新語」における格助詞「を」及び「을・를」の研究―日本語と韓国語の対照の観点から―』麗澤大学大学院言語教育研究科日本語教育学専攻平成 12 年度博士論文

梅田博之（1977)「朝鮮語はどんな言語か」『月刊言語』9 大修館書店

梅田博之（1985)「韓国人に対する日本語教育と日本人に対する朝鮮語教育」『日本語教育』55 号 日本語教育学会

奥村三雄（1972)「古代の音韻」『講座国語史 2 音韻史・文字史』大修館書店

小倉進平著 河野六郎補注（1986)『増訂補註朝鮮語学史』西田書店

亀井孝（1984)「『捷解新語』の注音法」『亀井孝論文集 3』吉川弘文館

京都大学文学部国語学国文学研究室編（1957)『捷解新語』京都大学国文学会

京都大学文学部国語学国文学研究室編（1957)「捷解新語國語索引」『捷解新語』京都大学国文学会

京都大学文学部国語学国文学研究室編（1972)『三本対照　捷解新語　本文篇』京都大学国文学

金愍爽（2008)『『捷解新語』における人称代名詞の研究』麗澤大学大学院平成 20 年度博士論文

河野六郎（1955)「朝鮮語」『世界言語概説下巻』研究社

ジョアン・ロドリゲス原著、土井忠生訳註（1955)『日本大文典』三省堂

趙堈熙（2001)『朝鮮資料による日本語音声・音韻の研究』J&C、ソウル

鄭光編著（1988)『諸本集成倭語類解』太学社、ソウル

鄭光編著（1990)『原刊活字本 捷解新語』弘文閣, ソウル

陳南澤（2003)『朝鮮資料による日本語と韓国語の音韻史研究』東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻言語学専門分野博士学位論文

辻星児（1997)『朝鮮語史における「捷解新語」』(岡山大学文学部研究叢書 16)

土井忠生・森田武・長南実（1980)『邦訳 日葡辞書』岩波書店

外山映次（1972)「近代の音韻」『講座国語史 2 音韻史・文字史』大修館書店

中山めぐみ（2004)「『捷解新語』のハングル音注―語頭の濁音を表す表記について―」『麗澤大学紀要』第 79 巻

中山めぐみ（2005a)「『捷解新語』のハングル音注―語中のガ行音とダ行音について―」『麗澤大学紀要』第 80 巻

中山めぐみ（2005b)「『捷解新語』のハングル音注―語中のザ行音とバ行音について―」『麗澤大学紀要』第 81 巻

浜田敦（1955)「語末の促音」『国語国文』24–1　京都大学国文学会

浜田敦（1963)「捷解新語とその改修本―『日本』と『看品』」『国語学攷』30　広島大学国語国文学会

浜田敦（1970)『朝鮮資料による日本語研究』岩波書店

韓先熙（1989)「『捷解新語』原刊本の撥音について―その表記を中心に―」『ことば』10　現代日本語研究会

森田武（1957)「捷解新語解題」『捷解新語』京都大学国語国文学会

安田章（1960)「重刊改修捷解新語解題」『重刊改修捷解新語』京都大学国文学会

安田章（1990）『外国資料と中世国語』三省堂

執筆者紹介

中山めぐみ　　麗澤大学外国語学部准教授
1999 年麗澤大学大学院言語教育研究科日本語教育学専攻修了（文学修士）
主要論文「17 世紀における長音化について―朝鮮資料『捷解新語』の仮名本文とハングル音注を通して」『麗澤学際ジャーナル』第 15 巻第 2 号、2007 年 9 月